

研究ノート

アジアのポルトガル人子孫コミュニティの歴史と現状
—マカオ・マラッカ・スリランカの事例から—

A História e a Atual Situação das Comunidades dos
Descendentes Portugueses na Ásia
- casos em Macau, em Malaca e em Sri Lanka -

内藤 理佳
NAITO Rika

Portugal adotou a estratégia de promover o casamento entre portugueses e o povo das suas colónias ultramarinas, o que resultou no surgimento de mestiços que foram considerados como “portugueses” para servirem como soldados locais e também como membros suplementares da classe social dominante. Os estudos e as pesquisas que desenvolvi na área da antropologia cultural eram nomeadamente sobre a etnicidade e a atual situação da comunidade dos descendentes portugueses em Macau. Nesta nova tese, desejo realizar uma análise comparativa das etnicidades não só de Macau mas também dos descendentes portugueses de outras comunidades que foram formadas antes da fixação dos portugueses em Macau, as comunidades de Sri Lanka (Ceilão) e de Malaca (Malásia) através de quatro teses até hoje divulgadas.

目次

はじめに

1. マカオのポルトガル人子孫の歴史と現状
2. スリランカのポルトガル人子孫の歴史と現状
3. マラッカのポルトガル人子孫の歴史と現状

おわりに—ポルトガル人子孫のエスニシティ比較

はじめに

1415年の北アフリカ・セウタ攻略を皮切りに、のちに「大航海時代」の名称で周知されることとなったポルトガルの海外進出は、1494年にスペインとの間に結ばれたトルデシーヤス条約（海外領土分割に関する協定）によってアフリカ大陸南端・喜望峰を経由した東回りで推進された。1498年、ヴァスコ・ダ・ガマがインド航路を開拓してインド・カリカットに到着、ポルトガルは同地域を支配していたイスラム教徒を制圧してカリカット・ゴア・ダマオン・ディウならびにセイロン（現スリランカ）を支配下に置くとともに進路を西方に向け、アジア貿易の重要な中継地であったマラッカ（マレーシア）、香料諸島の別称で知られたモルッカ諸島（インドネシア）に到達、当時ヨーロッパで珍重され高価な値段で取引されていたアジア原産スパイスの貿易ルートを掌握し国力は強大化した。ポルトガルは1517年、次なる目的地として中国（明朝）との対等な立場での貿易を望んだが朝貢貿易しか認めない同朝との交渉は決裂、密貿易の形で継続することを余儀なくされ、根拠地を求めて中国沿岸を転々とした¹結果、最終的にマカオ（澳門）に辿り着いた。ポルトガル人は広東の地方官憲の許可により1557年頃から定住を始め、以後、マカオは当時日本と中国（明）の間の貿易が断絶していた背景を利用した日中間の中継貿易ならびに極東におけるキリスト教布教の拠点として17世紀半ばの日本鎖国まで繁栄した。

往時の海洋帝国といえども人口規模としてはヨーロッパの小国であったポルトガルは、アフリカ・アジアの海外植民地政策として、本国から派遣するポルトガル人男性と現地女性との通婚を奨励し、その結果生まれる「混血」の子供たちを現地生まれのポルトガル人として有事における兵力やポルトガル人に次ぐ現地社会の準支配階級として利用した。

とくにマカオの場合、国際法上ポルトガル領となったのは19世紀後半のことであったものの、20世紀末まで四世紀以上にわたり事実上のポル

1 1543年に種子島にポルトガル人が漂着したのはこの時期に当たる。

ポルトガル植民地として継続した歴史的背景から、おもにポルトガル人男性と現地中国人の女性の間に生まれたマカエンセ (Macaense) と呼ばれるポルトガル人子孫のコミュニティが存続し、1999年に中国に返還され同国特別行政区となった今もマカオ社会におけるエスニック・マイノリティでありながら、「東洋」と「西洋」双方の文化や伝統を継承した独自のエスニシティを守り続けている。

これまで筆者はマカオにおけるマカエンセ・コミュニティの現状とエスニシティに関する文化人類学的研究を専門的に行なってきた²。本稿では、ポルトガル人がマカオ以前に逗留したスリランカ (セイロン) およびマラッカに存続するポルトガル人子孫コミュニティに関してこれまでに発表された四点の論文を取り上げ、マカオ・スリランカ・マラッカというアジアの三地域に暮らすポルトガル人子孫コミュニティの辿ってきた歴史と現状の事例研究を通して、彼らのエスニシティの比較検討を試みる。

1. マカオのポルトガル人子孫の歴史と現状

歴史

マカオのポルトガル人子孫は、ポルトガル語でマカエンセ (Macaense, 複数形は Macaenses) という名称で呼ばれる。同じくポルトガル語で「大地の子」(Filhos da terra)、返還前のある時期までは「東洋のポルトガル人」(os Portugueses do Oriente) とも呼ばれていた。また、中国語では「土生葡人」と呼ばれる。³

マカエンセは、16世紀半ば、ポルトガル人のマカオ定住に伴って誕生した。ポルトガルの現地婚政策により、マカオに來航したポルトガル人男性と結婚して家族を形成しマカエンセの「母親」となった女性たちは、実は19世紀頃までは現地の中国人女性ではなく、大多数がマカオ以前にポルトガル人がすでに定住していたゴア・インドシナ・マレーなどの地域出身の女性もしくは白人との混血であるユーラシアン (Eurasian) であった

2 内藤理佳『ポルトガルがマカオに残した記憶と遺産—マカエンセ—と言う人々』上智出版、2014年。

3 マカエンセの名称として、日本のTV番組などでは英語のマカニーズ (Macanese) という名称が使用される場合もあるが、Macanese (澳門人) はポルトガル人子孫のみならず広義の「マカオ住民」「マカオ人」としても使用されるという両義性を持つため、本稿では使用しない。

という説が一般的に支持されている。⁴その理由は、仏教文化のもと高度な文明を誇示していた明朝において、社会の低層に属する船上居住者や奴隷以外の一般の中国人女性と接触をとることは、社会的にも宗教的にもほとんど不可能であったからである。

その後マカオがアジアにおけるキリスト教布教の中心地となったことからキリスト教に改宗する中国人市民が増加し、次第にポルトガル人男性と現地の中国人女性との婚姻関係が結ばれ、特に19世紀以降はこのケースが一般的となっていったと考えられる。こうしてマカオにはヨーロッパとアジアの「混血」の子孫が増え、マカエンセのコミュニティが形成されていった。彼らは「マカオ生まれのポルトガル人子孫」としてポルトガル式の教育を受けて育ち、ポルトガル語を母語としながらも、現地中国人との「混血」であることで中国語（広東語）の会話に長けていた。この特徴が返還前のマカオ社会において優位性を発揮する。ポルトガル本国より数年単位で派遣される行政トップのマカオ総督を頂点とするごく少数のポルトガル人が社会の上層部として行政を司り、人口の9割以上を占める中国系一般住民を支配する図式が形成されていた。支配層のポルトガル人には中国語（広東語）を学び話そうという意欲はなく、いっぽう被支配層であるマカオの中国系一般住民に対するポルトガル語教育はほとんど実施されなかったため、両コミュニティ間にはお互いの言語を理解しないという大きな障壁があった。このような体制下、バイリンガルであったマカエンセが、ポルトガル人と中国人の間をとりもつ中間層として機能し、中国人と競争することなく中級公務員・警察官・弁護士・裁判官などの職業を獲得し、安定した収入と地位を得ることができたのである。精神面においても「自分たちは東洋のポルトガル人である」という自己アイデンティティと中国系一般住民に対するエリート意識が形成され、この状況は1999年の中国返還まで続いた。

実はマカオ定住後およそ300年間にわたり、ポルトガル人は広東地方官

4 実は日本人の先祖たちも、マカエンセを形成するひとつのエスニックグループであったと考えられている。1612年の日本におけるキリスト教禁教令、さらに1639年の日本へのポルトガル船来航禁止令により、若い世代を含む多数の日本人キリスト教徒たちが日本を追放されマカオに流入した。この中からポルトガル人もしくはその子どもたちと婚姻関係を結び、マカエンセの「母親」となったものもいたと考えられている。

憲に租借料（地代）を支払い続けることで定住を黙認され、事実上の植民地支配を行ってきたが、その間、ポルトガルと中国（明・清）との間にマカオに関する正式な国際条約が結ばれたことは一度もなかった。このような状態が解消されたのが1887年の葡清友好通商条約であり、ここにおいて初めてマカオがポルトガル領であることが清朝に認められた。第二次世界大戦後、欧米各国の植民地であったアジア・アフリカ各国が独立する中、1974年まで旧態依然とした軍事独裁国家体制を敷いていたポルトガルはマカオの植民地支配を続けた。1974年のポルトガル民主革命後、1979年にポルトガルと中国は正式に国交を樹立、水面下で中国返還のスケジュールが進み、1987年中葡共同声明によって12年後のマカオ返還が公表され、「アジア最後のヨーロッパ植民地」と揶揄され続けてきたマカオは1999年12月に中国に返還され、香港同様中国特別行政区として生まれ変わり現在に至る。返還後のマカオは一国二制度のもと、50年間は返還前と同じ資本主義の継続が約束されており、カジノ産業に支えられた好景気がしばらく続き域内住民の生活レベルは非常に高い状況が続いている。

ポルトガル人子孫の現状

マカエンセ・コミュニティは社会のエスニック・マイノリティでありながら、支配階級であったポルトガル人と結託することで4世紀以上にわたりマカオ社会の中で一種の特権を享受してきた。しかし同時に、中国とポルトガル両国で歴史的事件が起こるたびに直接的な影響を受けてきたマカエンセにとって、自らを取り巻く状況の変化によってマカオを離れ海外に移住することは人生の選択のひとつであった。第二次世界大戦前の不況の時代には職を求めて大量のマカエンセが香港・上海へ移住し、その後も1974年のポルトガル民主革命、1999年の中国返還の前後に多数のマカエンセが香港・カナダ・オーストラリア・アメリカ・ブラジル・ポルトガルといった英語圏・ポルトガル語圏の国々や地域へと移住した。その結果、現在世界規模で約2万人程度と見積られるマカエンセ総数のうち、マカオ域内に生活する者は約8千人と少数派になっている。

返還後、社会の急速な中国化とともに、マカオ在住のマカエンセを取り巻く環境は大きく変化を遂げた。ポルトガル語と並んで公用語となった北

京語の発音は広東語とは外国語同様に異なり、バイリンガルと言っても広東語の会話だけが堪能で漢字の読み書きはできない者が多い40代以上のマカエンセにとって新規雇用や昇進は非常に難しくなった。また、返還を機に大量のポルトガル人がマカオを去り、同時にポルトガル人の血を引くことが社会的な有利性を持たなくなったことから、若い世代のマカエンセが結婚相手としてポルトガル人を選択せず、現地中国人と婚姻するケースが多数派となってきた。このような社会変化の中で、子どもの教育をポルトガル語から中国語もしくは英語に切り替えるマカエンセ・ファミリーが増加している。こうして、かつて「マカオに生まれ、ポルトガル語を母語とし、ポルトガル式教育を受け、ポルトガルとの精神的・文化的な絆を基盤としたエスニック・アイデンティティを継承してきたポルトガル人子孫」として存続してきたマカエンセ・コミュニティは、返還後わずか15年のうちにこれらのエスニック表徴を急激に失いつつあり、それはすなわち、コミュニティ存続の危機をも伺わせる。

このような危機的状況を前にして、特に現在40代以上のマカエンセが中心となり、ポルトガルとの深い絆を基盤としたマカエンセ伝統文化の復興運動が行なわれている。その代表としてマカオのポルトガル系クレオール語を使用した演劇活動とマカエンセの伝統料理が挙げられる。

マカオのポルトガル語系クレオール語はフランス語を語源とするパトゥア (Patuá) またはマキスタ (Maquista) の名で呼ばれる。後者はクレオール語の話者であるマカエンセを指す場合もある。パトゥア語は広東語、マレー語・英語・コンカニ語 (インド、ゴア州の公用語)・日本語・タミル語・サンスクリット語・ペルシャ語・アラビア語・ヒンドゥー語・オランダ語・スペイン語・フランス語・ドラヴィダ語などの影響を受け、ポルトガル語を土台として多様な言語の語彙と体系を持つクレオール語として、マカエンセと一部のマカオ在住の中国人を中心としたコミュニティ間の話し言葉として受け継がれてきたが、19世紀後半からポルトガル語教育が一般化されることによってポルトガル人教育者から「誤ったポルトガル語」と非難されて次第に話されなくなり、20世紀初頭以降はほとんど耳にすることはなくなった。現在はマカオもしくは海外在住の高齢者のマカエンセの一部が家庭内で話す程度になっており、消滅の危機に瀕している。1990年代前半、パトゥア語を貴重なマカオ文化として再認識するためにパトゥ

ア語劇団が旗揚げされ、以後毎年定期公演を行ない地道な啓蒙活動を続けている。

マカエンセの伝統料理は、本来家庭料理として各家庭で継承されてきたが、20世紀後半に商業化されレストランのメニューに組み込まれるようになり、今や外国人観光客をターゲットとしたマカオ観光のセールスポイントのひとつとなっている。マカエンセ料理はポルトガル料理をベースにして、アフリカ、インド、マレー（インドシナ）、そしてマカオの地元である広東料理の原材料やスパイス、料理法を組み合わせた、いわゆる「大航海ルートの集大成」とも言える料理である。

2006年、七団体のマカエンセ関連協会が集まりパトゥア語をユネスコ指定の無形文化遺産候補として登録する同意書に署名、以後国際的な理解を求める活動が行われた。2012年、パトゥア語劇（土生土語話劇）とマカエンセ料理（土生葡人美食烹飪技藝）がマカオ特別行政区無形文化遺産として正式に認定され、認知度が高まった。マカエンセ・コミュニティの指導者たちは若い世代のエスニック・アイデンティティ再認識に期待を寄せている。

2. スリランカのポルトガル人子孫の歴史と現状⁵

歴史

ポルトガル人は1510年、インド西海岸中部に位置するゴアを「ポルトガル領インド」の軍事上および布教上の首都として定めた。同海軍のスリランカ到来と植民地化はその5年前、1505年のことであった。以後、スリランカ（当時はセイロン）はポルトガル統治時代（1505～1658）、オランダ統治時代（1658～1796）、イギリス統治時代（1796～1948）を経て独立を果たした。

約150年間に及んだポルトガル統治時代（1505～1658）、他の植民地

5 本章では次の二論文を参照した。

Shihan de Silva Jayasuriya, *The Portuguese Cultural Imprint on Sri Lanka*, London, Lusotopie 2000, 1998, pp.253-259.

Dennis B. McGilvray, *The Portuguese Burghers of Eastern Sri Lanka in the Wake of Civil War and Tsunami*, Jorge Flores, ed., *Re-exploring the Links: History and Constructed Histories between Portugal and Sri Lanka*. Wiesbaden: Harassowitz Verlag, 2007.

同様にキリスト教化と現地人との交婚が推奨され、多数のポルトガル人子孫が生まれた。1580年、インド巡察師として日本にも滞在したイエズス会神父アレッサンドロ・ヴァリニャーノはポルトガル本国への書簡に当時のインドおよびセイロン社会の人口構成について、統治者である「生粋」のポルトガル人に次ぐ階層として、ポルトガル人の父親とヨーロッパとアジアの「混血」であるユーラシアン (Eurasian) の母親の間に生まれた人々であるカスティッソ (castiço)、ポルトガル人の父親と現地人の母親の間に生まれた人々であるメスティッソ (mestiço) について解説している。また、ポルトガル植民地下、ポルトガル語をベースとしたクレオール語が生まれ、行政・交易・布教上のリングア・フランカ (公用語) として発展していく中で、ポルトガル人の血を引く人々は現地語で「二つの言語が話せる者」を意味するトパース (topass, topaz, topazes < topaz の複数形 > , tupass, toepas) の別称でも呼ばれていた。

ポルトガルに代わって台頭してきたオランダによるセイロン統治時代 (1658～1796)、少数のヨーロッパ支配階級が現地人を統治する社会構成は変わらなかったが、社会のトップはポルトガル軍からオランダ東インド会社に、また東アジア行政の中心地はゴアからバタヴィア (ジャワ島、現インドネシア) に移された。セイロン在住のヨーロッパ人は、いずれ本国に帰国する東インド会社社員 (軍人、商人を含む) と、元同社社員で現地での結婚と定住の道を選んだフリー・バーガー (Free burghers) のいずれかに分類された。⁶ ポルトガル人同様、オランダ人はアジア植民地に同国人女性を同伴しなかったため、フリー・バーガーが妻として選んだのは現地女性であったが、その大半はポルトガル統治時代の終焉とともに夫や父親を失ったポルトガル人ファミリーの未亡人や娘たちであり、ポルトガル人の血を引く者であった。ポルトガル人と現地人の「混血」であるトパースの男性はおもにオランダ軍の兵隊もしくは東インド会社の下級職員として職を得た。

イギリス統治時代 (1796～1948) に入るとバーガーのコミュニティは「オランダ系」と「ポルトガル系」に大きく二分されるようになる。公式にはバーガーはセイロン在住のすべての「混血」の人々を指す名称であったが、オランダ系バーガーの中からその仕事ぶりや忠実さによって支配階級の信

6 語源はオランダ語の vrijburgers で、“Free citizen, Free merchants” (自由市民、貿易商人) を表す。

頼を獲得して行政職や警察官などの重要な職業に就く者が輩出し、さらに19世紀半ば以降、次第にオランダ系バーガーのコミュニティ全体がセイロン社会の中産階級を構成していくようになる。1908年、セイロンオランダ系バーガー組合（DBUC-Dutch Burgher Union of Ceylon）が設立され、会則によってオランダ系バーガーへの福利厚生への促進、会員間の互助・友好活動、オランダ式伝統習慣や言語の復興活動、歴史や家系図の作成や会報の出版などの活動が提示された。会員の条件としては父方に一人以上のオランダ東インド会社出身のオランダ人がいることが義務付けられ、一種のエリート層として20世紀半ばまで機能した。

オランダ系バーガーが社会的に高く評価されていくいっぽう、小売業・鍛冶屋・服や靴の仕立て業に従事する者が多く、「貧しく無教養」であるときなされたポルトガル系バーガーへの風当たりが非常に厳しくなり、オランダ語で「職人」（ambachtslieden）を意味するポルトガル系バーガーの名称が英語の“mechanics”という名称に訳され⁷、イギリス統治時代を通じてポルトガル系バーガーを指す蔑称として使用された。

その後、スリランカは1948年イギリスから英連邦王国セイロンとして独立、1972年にはスリランカ共和国に改称、1978年からスリランカ民主社会主義共和国となり、現在に至る。

ポルトガル人子孫の現状

現在約2億人のスリランカ総人口のうち、73%がシンハラ人、18%がタミル人、8%がスリランカ・ムーア人であり、バーガーの人口はヨーロッパ系として計上されている0.2%の一部とみなされている。ポルトガル系クレオール語の話者であるバーガーの子孫の多くはスリランカ東部沿岸部のバッチイカロア Batticaloa 地区あるいはアンパラ Ampara 地区に居住している。2001年の統計では同地区に居住するバーガーの人口は3,448人を数えた。彼らはイスラム教徒やタミル教徒の居住地に挟まれる形でありながらもローマン・カトリックを信仰し、従来の職業であった手工業を職業とする者が多く、裕福な者は少数である。

スリランカは1658年にポルトガルに代わってオランダの統治下となり、

7 「職人」を表す英語は通常 handcraftsman である。

当然のごとくオランダ語が公用語に定められたのちも、バーガーの家庭や市場における主要言語は依然としてポルトガル系クレオール語であった。イギリス統治下となった1796年以降、オランダ語が公用語としての立場を失い急速に使用されなくなっていったのに対し、ポルトガル語系クレオール語は消滅することなくセイロン在住バーガーの方言として一般に普及していたという。

また、オランダ系バーガーが子孫に伝えていった伝統文化や言語にはオランダではなくポルトガルの影響が非常に強いことが確認されている。現世代のバーガーの名字（ファミリーネーム）はポルトガルよりもオランダを起源とするものが圧倒的に多い⁸が、オランダ式の伝統文化は一部の料理にしか残されていない。それに対し、ポルトガルの遺産はさまざまな面に根強く残っている。

言語面では、シンハラ語の語彙にポルトガル語起源と考えられるものが約1000語あり、行政・司法・軍事用語のほか、建築・料理・家具・服装・教育・音楽・ダンス・宗教・果実名・人名など多岐にわたり、ポルトガル統治時代の強い影響力を感じさせる。また、ポルトガル系クレオール語は英語およびタミル語の強い影響を受けて変容しつつもバーガーのコミュニティの中で使用されている。宗教面では、オランダ統治時代にオランダ人男性との妻となったポルトガル人混血女性が信じていたカトリックの教えは現在もなおポルトガル系バーガーのコミュニティに引き継がれている。また、ポルトガル系バーガーが継承してきた音楽や伝統舞踊もオランダ系バーガーに広く受け入れられ、現在までその形をとどめている。

3. マラッカのポルトガル人子孫の歴史と現状⁹

歴史

マレー半島西部に位置する港湾都市であるマラッカ(英語:Malacca, マレー

8 Wittebron, Outschoorn, Hendrik, Toussaint, Ockersz など。

9 本章では次の二論文を参照した。

Eileen Lee, *Language Maintenance and Competing Priorities at the Portuguese Settlement, Malacca*. *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies*, 30. pp. 77-99, 2011

Margaret Sarkissian, *Being Portuguese in Malacca: The Politics of Folk Culture in Malaysia*, *Ethnografica*, Vol. IX (1), Lisbon, 2005, pp. 149-70.

語ではムラカ Melaka) は現在人口約 45 万人、ムラカ州の州都で、マレーシア 13 州の中では三番目に小さい。1396 年にイスラム教国であるマラッカ王国が成立、東西の香辛料貿易の拠点として繁栄した。1405 年、中国 (明) の永楽帝に使えていた海軍大将鄭和が来航し、以後明との朝貢関係を結んだ。

1511 年ポルトガルから派遣されたインド総督アフォンソ・デ・アルブケルケによって征服され、以後 130 年間、東アジアにおけるポルトガルの貿易拠点として引き続き繁栄する。ポルトガル統治時代 (1511 ~ 1641)、現地婚政策によって混血 (メスティッソ) が誕生するとともに、イスラム教徒であったマレー人・ジャワ人の中からキリスト教徒へ改宗する者も増え、これらの者はポルトガル式の名字を獲得しメスティッソと結婚することによってポルトガル系マレーシア人のコミュニティを作っていた。

1641 年、マラッカはオランダ (東インド会社) の再三にわたる攻撃によってポルトガルによる支配が終焉し、オランダ植民地となる。経済的には交易の中心地がバタヴィアに移管されたことで国際貿易港としての重要性を失うこととなった。支配階級として赴任するオランダ人男性のほとんどは、スリランカの例と同様、現地に残された「ポルトガル人女性」、すなわちポルトガル人の血を引く女性達を妻とし、彼女らの信仰であるカトリックの生活様式に順応していった。

1824 年の英蘭協約によってマラッカはイギリスに割譲され、太平洋戦争中に日本軍によって占領された時期 (1941 ~ 45) を除き、1948 年までイギリス領海峡植民地のひとつとして機能した。同年マラヤ連邦が成立し、1957 年に完全独立を達成、1963 年にシンガポール・東マレーシアのサバ、サラワクを加えたマレーシア連邦が成立、1965 年にシンガポールが分離独立して現在のマレーシアが成立した。なお、マラッカには現在もポルトガル・オランダ統治時代の歴史的建造物やスルターン王宮を復元した木造建築が残り、「マラッカ海峡の歴史的都市群」として、ペナン島市のジョージタウンとともに 2008 年ユネスコの世界遺産に登録されている。

英領時代、マラッカのユーラシアンは財産、職業、教育面で二つの異なる社会階層に分類されていた。上層階級は「アッパー・テン」(Upper Tens, おそらく「上の 10%」を意味する Upper tens percent に由来すると考えられる) という通称で呼ばれ、自らがユーラシアンであるというアイデンティティを持ち、オランダ系もしくはイギリス系の名字を持ち続け

ることを望み、英語を母語として教育を受け、多数がイギリス系のホワイトカラーとして働いていた。それに対し、下層階級を占めていた「ポルトガル人」(Portuguese)と呼ばれた人々はしばしば「貧しいポルトガル人」(the Poor Portuguese)の別称でも呼ばれ、その大多数が無学でクリスタン Kristang と呼ばれるポルトガル系クレオール語を話し、漁民や魚屋として生計を立てる人々であった。より豊かなアッパー・テンのユーラシアンは他のヨーロッパ人や裕福な中国商人と同様の居住地やマラッカ中心街南側に、また「貧しいポルトガル人」たちは沿岸地帯に密集して棲み分けていた。「貧しいポルトガル人」たちの生活状況はあまりに貧しかったため、1926年代、イギリス高等弁務官は市内から南に数キロ離れた28エーカー(約11.3ヘクタール)のマングローブ(沼地)を整地し、「ポルトガル系人居住区」(注：本稿では以後「居住区」と記載)とした。居住区の中の通りにはポルトガル風の名前が付けられ、地区をまとめるリーダー(Headman)としてポルトガル語で「統治者」を意味するレジェドール(Regedor)が選出されて地区住民の福利厚生を管轄する形が取られた。最初のポルトガル系マレーシア人ファミリーがここに移住したのは1935年のことであったが、本格的に同コミュニティが拡大していったのは第二次世界大戦後のことであった。

戦時中、イギリス式の教育を受け、英語を母語とするアッパー・テンにとって、生活様式やスポーツ、趣味などに至るまですべて英国式に倣うことが自らのアイデンティティを守ることであった。しかし戦後、1950年代初期、マレーシア独立運動とともに、イギリスとの深い関係性が社会的な有利性を失うようになる。おりしも1952年、当時のポルトガル海外州相(外務大臣)のマレーシア訪問が決定したことを転機としてアッパー・テンは「ポルトガル人子孫であること」を政治的立場に利用し、ポルトガル伝統音楽・舞踊、服装といった文化的シンボルをマラッカ在住のポルトガル人神父や英訳された文献を通して習得し、同外務大臣を迎える歓迎行事の前で披露した。

マレーシア独立後、多数のアッパー・テンはマレーシアを離れ、オーストラリアをはじめとする旧英国領やシンガポールに移住していった。それに伴い、居住区に住む若者たちがポルトガル外務大臣来訪の際にアッパー・テンが披露した歌や舞踊を習得し、世代から世代へと受け継がれるように

なった。これらの歌や舞踊はマレー現地文化と混交し、現地文化、すなわちマレー文化のひとつとして強調されることとなる。

1983年、マラッカ州政府が主要産業として観光業を促進することにより、居住区の経済的状況は劇的に改善する。マラッカ州政府は「マレーシアの歴史都市マラッカ、全てが誕生した場所」をスローガンに、ポルトガルとの歴史的絆を強調し1984年にはポルトガル首都リスボンと姉妹都市盟約を締結、ポルトガルの「栄光の時代」を彷彿とさせる文化的アイコンとして居住区を整備、同居住区内に「ポルトガル広場」(Portuguese Square)を建設して観光地化し、同地を訪問する観光客たちがエンターテインメントとして「ポルトガルダンス」を楽しめるようにした。居住区は1991年に同州の歴史的モニュメントに制定され、以後「16世紀に駐留したポルトガル人船乗りたちの直系の子孫たちが居住する歴史の生きた跡」として紹介されている。

ポルトガル人子孫の現状

16世紀初頭から国際都市として発展してきたマレーシアは世界の中でも民族構成が複雑な多民族国家として知られ、2001年の人口統計ではマレー系65%、華人系26%、インド系8%、その他1.2%となっている。本稿で取り上げるポルトガル人子孫は「その他」に当てはまるが、全体の人口は定かではない。しかしマラッカ全人口から推測すると、現存するポルトガル人子孫は全体の0.43%、およそ2800人という数字が割り出せる〔Sarkissian 2005:152〕。¹⁰ 現在ポルトガル系人居住区には約110戸の住民が住んでいる。

ポルトガル領時代にマラッカ住民の共通言語として成立したポルトガル語系クレオール語はクリスタング (Kristang) もしくはパピア・クリスタング (Papia Kristang) であった。クリスタング (Kristang) は“Cristao”とも表記され、ポルトガル語で「クリスチャン、カトリック教徒」を表す

10 マラッカにおける「ユーラシアン」(Euransian) すなわちヨーロッパとアジアの「混血」の人々の祖先はポルトガル人、オランダ人、イギリス人、さらに改宗してポルトガル系の名字 (ファミリー・ネーム) を獲得したその他の人種やマレー人も含まれる。

“Cristão”に由来する。また、“Papia”はマレー語で「話す」という動詞を表すので、パピア・クリスタングは「クリスチャンの言葉」を意味し、同クレオール語の話し手であるポルトガル人子孫そのものを指す場合もある。クリスタングの語彙にはマレー語起源のものが圧倒的に多く、シンガポール、インドネシアのスマトラ島・ジャワ島・フローレス島、セレベス（現スラウェシ）島、ティモール島（現在東ティモールは独立国）、モルッカ（マルク）諸島などで確認されているポルトガル語系クレオール語とも類似性を持っている。クリスタングはおもに居住区のポルトガル人子孫の間で細々と継承されてきたが、ついに1984年、ユネスコによる消滅危機言語のひとつに挙げられ、1996年に言語学者バクスターは「(同言語は)すでに消滅しつつある」と警告をならした。

1997年、マラッカポルトガル系・ユーラシアン協会 The Malacca Portuguese Eurasian Association が設立されたが、中心となって活動する人々の多くが居住区以外の出身であったことから、かつて、アッパー・テンが自らの政治的理由でポルトガル人子孫という文化的アイデンティティを利用した事実が再び繰り返されると危惧した居住区の住民たちから反対と不信感の声が上がった。しかし設立側には「ポルトガル系」「ユーラシアン」という言葉を併用することによって、ポルトガル人以外の多様な出自を持つマレーシアの「混血」の人々を対象とし、居住区住民以外の人々にも同協会の活動を支持して欲しいという意図があった。その後、居住区出身の40代の若い指導者が輩出したことにより、同協会の活動は軌道に乗るようになり、2002年、「ディナー、文化ショー、ダンスの集い」“The Dinner, Cultural Show, and Dance”と命名された大規模なイベントが実施された。参加費の収集を通じて協会事務所の設置、教育プログラムの促進、文化芸術を学べる教育施設の創設さらにマレーシア国内やシンガポールの他のユーラシアン協会との交流を目的としたこのイベントは成功をおさめ、協会会長はエスニック・マイノリティ保護のための新省庁の設立とポルトガル系およびユーラシアンの人権保護を求めた。

前述のように居住区は「ポルトガル人の直系子孫の居住地」という形で解説されているが、実際の居住区住民たちはポルトガル人、オランダ人、イギリス人、ゴア人、アフリカ人、中国人ら異人種の「混血」の人々であり、その中にはカトリック教徒に改宗したマレー人も含まれている。住民たち

が日常生活で着用するのは、年配者はマレー風のサロンケバヤ、若者たちは日本と同様の洋服であり、観光客の前で着用するポルトガル舞踊の衣裳を着て生活することはない。歌を伴うポルトガル舞踊はあくまで観光用として行われ、彼ら自身の生活の中で祝祭時に行なわれることはほとんどない。

おわりに—ポルトガル人子孫のエスニシティ比較

本稿では、これまでマカオ・スリランカ・マラッカの三地域におけるポルトガル人子孫の歴史と現状について紹介してきた。マカオに関しては、2008年からはほぼ毎年実施しているフィールドワークを通じてポルトガル人子孫（マカエンセ）の置かれている状況について最も現状に近い考察ができていていると考えているが、スリランカとマラッカの二地域については、筆者自身がこれまで訪問した経験がなく、スリランカに関しては McGilvray (2007) と Jayasuriya (2000)、またマラッカに関しては Sarkissian (2005) と Lee (2011) の四論文に全面的に依拠せざるを得なかった。このようになかなかアンバランスな事例研究比較ではあるが、三地域に暮らすポルトガル人子孫のエスニシティの現状について考察を試みたい。

スリランカ・マラッカとマカオの歴史的背景の最も大きな相違点は、前者が16世紀初頭からポルトガル・オランダ・イギリス三カ国の植民地支配をそれぞれ1～2世紀に渡って受けたのちに自国として独立した経緯を辿ったのに対し、マカオはポルトガル一国の植民地統治を4世紀以上受け続けた結果、中国に「返還」される形になったという点である。当然の結果として前者のポルトガル人子孫にはマカオほどのポルトガルのエスニシティは残っていないと予想されるが、McGilvray はスリランカのポルトガル人子孫（バーガー）には最初に統治したポルトガルの影響が非常に強く、ポルトガルの「遺産」は音楽や舞踊に残されていると述べ、Jayasuriya は現代シンハラ語の語彙に見られるポルトガル語の色濃い影響を報告している。しかし残念ながら、両者の論文からはなぜポルトガルの影響がそれほど色濃く残されたのか、また、現在を生きているポルトガル人子孫のポルトガルのエスニシティがどれだけ強くみられるのかを読み取ることは難しい。

いっぽう、マラッカの事例はマカオの事例に引き寄せて考察することが可能になると考える。Sarkissian は当時 40 代のマラッカポルトガル系・ユーラシアン協会会長、Joseph Sta. Maria のコメントをつぎのように紹介している。「我々はポルトガル系マレー人であり、双方の文化を誇りに思っている。我々はマレー社会に同化してきた。しかし、我々はいまだにポルトガル人子孫として、カトリックの信仰を守り、ポルトガルに起源を持つ歌や舞踊を継承し、我々独自のアイデンティティを持ち続けている。」さらに Sarkissian は近年ポルトガル系居住区に起きている大きな変化として、住民たち自身が、急速に変化を遂げる現状に適應して「トランスナショナルなアイデンティティ」を形成しつつある、と述べ、その例として、ポルトガル系人居住区の住民たちが子どもたちの住むオーストラリアのパースのポルトガル系マレー人居住区へと移住したり、一年の大半をポルトガル語圏ではないさまざまな文化圏で過ごしたり、出稼ぎをして帰ってきたりなどといった、これまで居住区のスタンダードとみなされていたものとは異なる社会経済活動をしながらも、ポルトガル人子孫としてのアイデンティティを保持していき、異なるトランスナショナルなアイデンティティが共存することで、「マレーシアにおける文化的アイデンティティ」を構築するポリティクスであった「ポルトガル性」(portugueseness) が、今日ではもっとフレキシブルに、そして多面的に捉えられていると考察している [Sarkissian:168-169]。

従来のエスニシティを失い、客観的には消滅しつつあるように見えるコミュニティが、実はトランスナショナルなアイデンティティを形成し、新たなエスニシティを構築しつつあるという Sarkissian の考察は、急激な中国化・中国人化とともに、ポルトガルとの強い絆を基盤として構築されていた従来のエスニシティの揺らぎとコミュニティ存続の危機が懸念されているマカオのポルトガル人子孫のひとつの肯定的な未来像としてとらえることが可能ではないだろうか。すなわちマカエンセの新しい世代が、ポルトガルにも中国にも精神的に依存しない自立したエスニシティを持ってマカオという土地と深く結びつき、彼ら同様にマカオに生まれ育った中国人コミュニティと同化しつつ、新たな「マカエンセ」としてのアイデンティティを形成していくということに他ならない。

本研究における今後の課題と展望として、スリランカとマラッカのポル

トガル人子孫のエスニシティの現状についてさらに詳しい文献調査を行ない、今現在、現在進行形で変容しつつあるマカオのポルトガル人子孫のエスニック・アイデンティティの動向を考察しつづけてゆきたいと考えている。

